

「人間の意識の死後存続に関するソウル宣言 2025」

背景

1. この宣言文の作成者たちは、長年にわたり人間の意識の死後存続の問題に関心を寄せ、研究を続けてきた。
2. その結果、人間の意識は脳内の神経生理学的過程の影響を受けるものの、その起源および存在そのものはそれとは独立しているとの見解で一致した。
3. 2024年12月21日、私たちは上記の主題について深く討議する会合を開き、人間の意識の死後存続とそれに関する知識が実生活に与える影響の大きさに深く共感した。この研究と議論の結果を公的な宣言文として明文化し、これを通じてより肯定的な社会変革に向けて共に歩み出す決意を固めた。

主張

4. 現代人の生命観や死生観は、還元主義的な唯物論に基づいている。この見解によれば、人間の意識は単に脳内の神経ネットワークにおける生化学的過程の副産物であり、肉体の死と共に完全に消滅するとされてきた。
5. 過去100年の間に、唯物論と科学主義が支配的な思想潮流として定着し、生命や意識を純粹に物質的な現象として理解しようとする傾向が強まった。しかし、この2500年以上にわたり、キリスト教、仏教、ヒンドゥー教、イスラム教などの東西の主要な宗教は、人間の意識が単なる物質的な産物ではなく、宇宙、天、神と表現される超越的な存在に由来し、肉体とは独立して存在するものだと教えてきた。これらの教えは、数千年にわたって多くの宗教指導者、靈的修行者、そして一般人が体験してきた「肉体と意識の分離」に関する膨大な証言によっても裏付けられている。つまり、意識の独立性は宗教

的教義の範囲を超え、歴史的に蓄積された膨大な経験的データ、すなわちビッグデータによって支持される事実である。

6. 私たちの人間の意識の死後存続に関する理解は、西洋の先駆的研究者たちからも大きな影響を受けている。19世紀には、フレドリック・マイヤーズやウィリアム・バレットらが霊媒通信、臨死体験、死後通信、テレパシー、遠隔透視などを研究し、死者の意識との交流の可能性を示唆した。20世紀に入ると、イアン・スティーヴンソンやピーター・フェンウィックら英米の研究者たちがこれらの研究をさらに拡張し、「意識の非局所性」—すなわち人間の意識が脳の機能にのみ限定されないという見解を一貫して提示してきた。
7. こうした学問的背景のもと、私たちは2015年に米国アリゾナ州ツーソンにて発表された「意識の非局所性を反映する統合的・根拠に基づく終末期ケアのための宣言」を全面的に支持する。彼らは次の五分野にわたる研究を通じて、肉体の死後にも意識が存続し得ることを実証的に示した：(1) 臨死体験、(2) 死後通信、(3) 臨終時の霊的体験、(4) 霊媒を通じた死者との交信、(5) 子どもの前世記憶を含む転生事例。彼らはまた、公益の増進にも深い関心を示し、特に医療現場での終末期ケアへの適用を強く訴えている。
8. 意識の死後存続という現象は、科学的手法による確認のみならず、宗教的・霊的体験を多角的に分析してきた人文学者たちからも支持を得ている。また、終末期の患者を看取る医療現場においても、医療従事者たちは臨終時の意識存続を示唆する特異な経験を繰り返し報告している。これにより、意識の死後存続は科学的実証、人文学的考察、そして医療現場での臨床的経験という複数の側面から支持され、東西を問わず人類が普遍的に共有してきた経験として確認されている。

適用

9. 私たちは、人間の意識の死後存続に関する研究成果と考察を、特に以下の二つの核心分野に優先的に適用することを提案する。
10. 第一に、医療現場の終末期ケア領域である。意識の死後存続に関する知識を共有することで、臨終を迎える患者が漠然とした死への恐怖を和らげ、平穏に死を迎える準備を整える助けとなる。これは死を「受け身に体験するもの」から「自ら迎えるもの」へと捉え直すことにより、患者に心理的安定をもたらす、遺族には「再会」への希望を与え、喪失の悲しみを乗り越える一助となる。また、死に頻繁に直面する医療従事者にとっても、成熟した生死観を確立し、心理的外傷を軽減し、終末期ケアの現場でより良い判断を下すための道しるべとなる。これは韓国社会に蔓延する過度な延命治療を減らし、死をめぐる暗い文化を克服するうえでも重要な役割を果たすと期待される。
11. 第二に、青少年の教育分野である。命を軽んじる風潮や高い自殺率は、幼少期から形成されてきた誤った死生観に根ざしている部分が多い。これを正すためには、青少年期から死に対する正しい認識を育む教育が必要である。したがって、意識は肉体の死後も存続し得るという内容を、青少年の教育課程に導入することを提案する。そのためには、児童心理や教育の専門家が参加する教育課程開発委員会を構成し、既存の教育内容を補完する必要がある。

結論

12. 現代社会に蔓延する「死ねばすべてが終わり」という皮相的な死の理解は、深い実存的不安と苦痛を生み出している。それは個人に怒りや絶望をもたらす、社会に卑俗な競争を促し、文明に過剰消費や戦争を引き起こす。このような現実のなかで、死に対する新たな理解は、個人と共同体がともに、より成熟し持続可能なあり方で人生を送り、文明を築いていくための契機となりうる。

13.人間の意識の死後存続に関する私たちの知識はまだ限られているため、今後
も深い研究を継続していく必要がある。そのためには、研究と実践を支える
精神的・物質的な支援体制を早急に構築しなければならない。あわせて、こ
の知識を生活や教育に応用する多角的なプログラムを積極的に開発していく
必要がある。これらの実践的努力を土台とし、幸せな未来世代を育み、新し
い韓国社会を築いていくために、私たちは共に歩むことを呼びかける。

2025年4月19日

ソウル、ユンスカラー・スタジオにて

宣言文 代表作成者

チェ・ジュンシク（韓国死生学会 会長）

ジ・ヨンヘ（オックスフォード・ヒューマンズ・コリア 執行部長）

チョ・ミョンジン（オックスフォード・ヒューマンズ・コリア 研究部長）

宣言に参加した人々（名前の順序はアルファベット順）

【韓国】

キム・ギョンムク

カチョン大学校 韓医科大学 教授

キム・ウネ

カチョン大学校 韓方内科学 助教

キム・ジヌク

映画監

パク・ジニョ

パク・ジニョ 前生研究所 所長

プ・ナムチョル

ヨンサン大学校 名誉教授

ソン・ヘヨン

ソウル大学校 宗教学科 教授

ウ・ギョンジャ

ソウル病院 企画室長

ユ・ジョンフン

チョンノ産業情報学校 教師
イ・ギョンマン
事前医療意思書 実践モノミ カウンセラー
イ・ジョンミン
ハイボイス 代表取締役
イ・ジョンヨン
フィギョン女子高校 教師
イ・ヒョナ
進路コンサルタント
イム・ギョンヒ
グデハム 代表
イム・ジェフン
ミョンジ病院 映像医学科 専門医
チョ・ミンス
法務法人ブクブ 弁護士
チョ・サンウォン
ハルリム大学校 医科大学 映像医学科 助教
チェ・ヨンシク
パク・ジニョ 前生研究所
チェ・ジュンシク
イファ女子大学校 名誉教授
ハム・ヨンジュン
マウムケンガン・ギル 代表
ファン・ジュハ
作家

【国際】

エベン・アレクサンダー3世 MD (米国)
脳神経外科医 (バージニア州シャーロットビル)
ピセンテ・アラエス PhD (スペイン)
メッタ・ホスピス財団 会長
カール・ベッカー PhD (日本)
京都大学医学部 教授
フィオナ・ボウイ DPhil (英国)

オックスフォード大学ウルフソン・カレッジ 人類学研究教授
ジョセフ・A・カマラータ (米国)

ヨンヘ・チ DPhil (英国)

オックスフォード大学アジア・中東学部 教授

ミヨンジン・アグネス・チョ MD (英国)

ダラム大学 医療人文学研究所 フェロー

ルイーズ・グリーン DPLTA MPLTA (英国)

オックスフォード・ヒューマンズ 常駐カウンセラー

平澤克彦 PhD (日本)

日本大学商学部 特任教授

丹羽泉 PhD (日本)

東京外国語大学 名誉教授

大門正幸 PhD (日本)

中部大学人文学部 教授

パク・ソングョ PhD (ドイツ)

ベルリン自由大学 名誉教授

チャールズ・プラウト (タイ)

ガイ・ロウ (英国)

杉岡良彦 MD, PhD (日本)

京都府立医科大学 准教授

セヴ・トク (米国)

作家

ハビエル・ウルチュエグイア PhD (スペイン)

バレンシア工科大学 教授

ピム・ヴァン・ロメル MD (オランダ)

心臓専門医 (元アーネムのラインステイト病院)

ローワン・ウィリアムズ, The Rt Revd and Rt Hon, PC FBA FRSL FLSW (英国)

第104代カンタベリー大主教

連絡先:

オックスフォード・ヒューマンズ・코리아: oxfordhumans@gmail.com

韓国死生学会: nahache@hanmail.net